

研修報告 日本史サマーセミナー報告

8月19～21日の三日間、県立横浜翠嵐高校を会場にして恒例の日本史サマーセミナーが行われた。今年は「日本近現代史をどのように学ぶか」というテーマで、午前中は高校と大学の教員が生徒を対象にした授業を行い、午後は大学教員から高校教師に対する講義の後に2時間余りの研究討議が行われた。猛暑の中、参加してくれた翠嵐高校はじめ生徒さん、遠路このセミナーにおいでいただいた先生方、ありがとうございました。三日間の内容は以下の通りです。

内 容 共通テーマ：日本近現代史をどのように学ぶか

8月19日 (月)	講座①	授業	国民国家と四民平等
	9:00～10:00	講師	桐生 海正 (足柄高等学校教諭)
	講座②	授業	戦争と文化を考える?～子どもたちは「戦争」に熱狂したか?
	10:15～11:45	講師	大串 潤児 (信州大学教授)
	講座③	授業	「台所」と「政治」を繋ぐ女性史学習～奥むめおの教材化を中心に
13:00～14:30	講師	齋藤 慶子 (日本女子大学准教授)	
14:45～17:00	研究協議		
8月20日 (火)	講座①	授業	国境の画定と国民国家
	9:00～10:00	講師	高橋 俊介 (神奈川総合産業高等学校教諭)
	講座②	授業	「大正デモクラシー」とは、どういうデモクラシーであるか
	10:15～11:45	講師	成田 龍一 (日本女子大学教授)
	講座③	授業	「歴史総合」の実践を創る視点～総力戦の時代をどう描くか
13:00～14:30	講師	齋藤 一晴 (日本福祉大学准教授)	
14:45～17:00	研究協議		
8月21日 (水)	講座①	授業	「日本国民」の誕生
	9:00～10:00	講師	生田 幸士 (大和東高等学校教諭)
	講座②	授業	なぜ徴兵制は導入されたのか
	10:15～11:45	講師	大江 洋代 (明治大学文学部兼任講師)
	講座③	授業	近現代日本セクシュアリティ史と(歴史)教育
13:00～14:30	講師	酒井 晃 (明治大学文学部兼任講師)	
14:45～17:00	研究協議		

8月20日の講座・討議内容について

生田幸士(大和東高校)

2日目は、高校教員の立場から、神奈川総合産業高校(定時制)の高橋俊介先生、大学教員の立場から、日本女子大学教授の成田龍一先生、日本福祉大学の齋藤一晴先生に講座をしていただいた。それぞれの講師からは、「国民国家」、「大衆化」、「総力戦」という新設科目「歴史総合」の中で重要なファクターをしめる歴史的テーマを意識した講座がなされた。

まず、神奈川総合産業高校(定時制)の高橋俊介先生による「国境の画定と国民国家」の講座で始

まった。県立歴史博物館特別展「北からの開国—海がまもり、海がつかない日本—」（2019. 7. 13～9. 1 開催）に着想を得た“国境の画定は国民国家の形成に何をもたらしたのか”を本時の問いとして講座が展開された。具体的な講座内容としては大きく3点あり、1点目に成田龍一ほか『新日本史A』実教出版の教科書から“国民国家”の定義と歴史的な位置を確認し、その中で国境の画定が国民国家（化）に果たす役割について確認した。2点目には、近世以来のアイヌ民族が置かれた状況と図像資料から明治政府のアイヌ民族に対する意識について分析させた。そして、3点目に戸籍法（1871）、旧土人保護法（1898）など強要的な明治政府の皇国臣民化の状況を史料から読み取らせるとともに、北海道地検発行条例（1877）など国民の権利が制限された内国植民地としての側面を読み取らせた。結果として、国境の画定の中でマイノリティーとしてのアイヌを題材とすることで、“国民国家（化）”が内在する“包摂”と“排除”の問題性に焦点を当てた講座となった。

次に、日本女子大学の成田龍一先生から『大正デモクラシー』とは、どのようなデモクラシーであったか—『改造の時代』を考える』の講座があった。具体的な講座内容としては3点あり、はじめに大正デモクラシーという歴史語句の射程を確認し、米騒動を契機に民本主義の時代（前半 1905～18）と改造の時代（後半 1918～31）に区分した。2点目には、史料をもとに民本主義の性質について読み取らせ、政党政治・社会運動・国体論の三者による改造の潮流（改造の時代）が普選の実現を促し、ひいては政治的意向が無視できない主体化された大衆が誕生した点を確認させた。しかし、3点目に冒険ダン吉の図像資料から植民地を有することが大衆にもたらす心性を読み取らせ、満州事変以降の大衆が軍部への熱狂に変転していった側面を分析させた。結果として、“大正デモクラシー”の“内に立憲（デモクラシー）、外に帝国（植民地支配）”という特質が、民本主義の時代・改造の時代の担い手としての大衆（社会）の誕生を促し、その大衆が満州事変を契機に一举に軍部を支持し総動員体制を生み出していった側面を、史料をもとに分析させた。デモクラシーの担い手であった大衆が、ファシズムの一翼へと統合されていく帝国のデモクラシーの可能性と限界を認識させる講座であった。

最後に、高校教員に向けて佐藤一晴先生から『歴史総合』の実践を創る視点—総力戦の時代をどう描くか—の講座があった。日本史Aの成果と課題の整理蓄積がまだ十分にはなされていない現状の中で、歴史総合の授業実践をどのように創造していくのかという問題意識から、実際の講座の中では、総力戦体制下を事例に生徒にとってレリバンスのある史・資料から問いを創り、授業実践を展開することの必要性が強調された。具体的な総力戦の授業実践の視点として、戦時下の大衆メディアとして紙芝居を通した子どもたちにとっての総力戦という視点、植民地下であった東アジア、東アジア史の教材化の視点、ナラティブな史料を個人的な経験として限定的にとどめない視点、外地での障害・障害者・障害児教育から総力戦を捉える視点などを具体的な史・資料を用いて提案がなされた。結果として、高校教員・大学教員ともに歴史総合に向き合い、総力戦体制や東アジア近現代史を扱う視点として、加害・被害、支配・被支配という単純化された二項対立という構図で描くのではなく、総力戦をよりリアルに描く視点として、少数の事例を含む個別具体的な事例から時代の全体像を捉えられるように授業や叙述を展開していく重要性を改めて再認識させられる講座となった。

「日本史サマーセミナー2019」3日目

桐生海正（足柄高校）

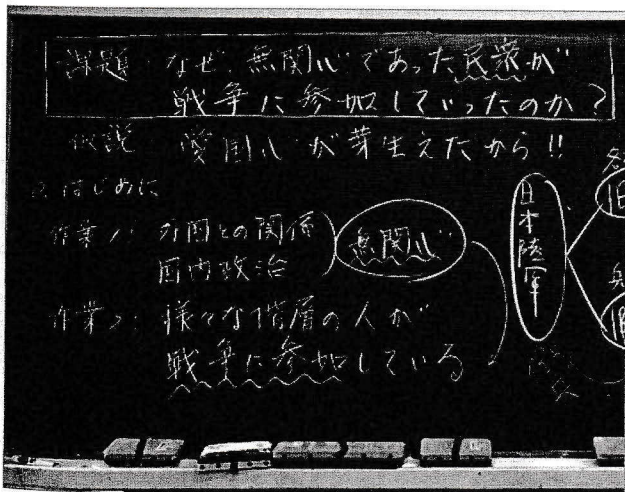
3日目は、初めに生田幸士氏（大和東高校）が『日本国民』の誕生』と題して、生徒に授業を行った。授業の最初に生田氏は二つの資料を提示した。一つが『自由燈』（1884年）で、資料には「何党が国家の多数を占めて天下の大権を左右しやうがコチャ構やせぬ」等とあり、政治に無関心な民衆を批

判的に揶揄していた。もう一方は、「承認状」(1895年)という資料で、日清戦争に際し、一個人から陸軍予備病院へ白木綿の献納が行われたことが読み取れた。そこで生田氏は、この二つの資料から民衆の態度の変化はなぜ起こったのかと生徒に考えさせた。そして「なぜ無関心であった民衆が戦争に参加していったのか?」という問いを提示した。その後、授業は教育制度の変遷や唱歌などを取り上げ、それぞれ資料に基づきながら民衆が「国民」化していった様相に迫った。この授業の意義は、「生徒に問いを考えさせる仕組み」と「資料に基づいた授業の展開の仕方」を提起した点にあったといえる。

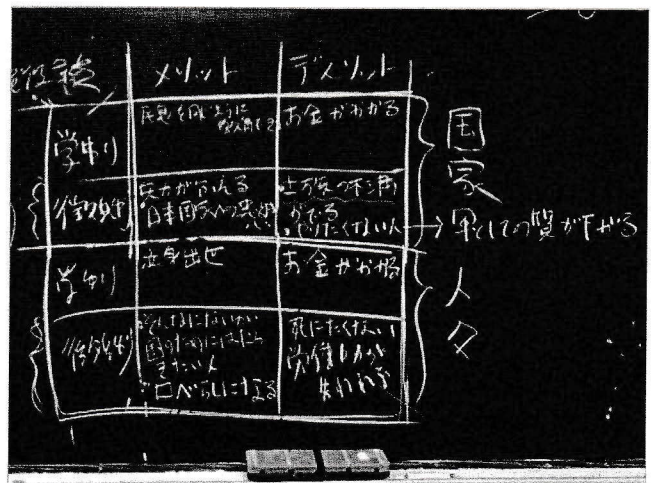
次に、大江洋代氏(明治大学)が「徴兵制はなぜ導入されたのか」と題し、生徒に授業を行った。初めに、加藤陽子氏と関原正裕氏の論争を紹介し、歴史研究の立場から軍隊や戦争は「悪いもの」であるが、必ずしもそこを起点にしておらず、しかもそこを起点にすると見えなくなるものがあることが示された。次に現代の問題としても残る徴兵制の問題に関して、フランスや台湾、日本等の状況を概観した。そして、今なお世界中で機能している徴兵制がなぜ日本では明治6年に導入されたのかに迫っていった。その中で、①から④までの学説を紹介し、それぞれの主張のポイントや問題点を指摘した。その上で、④の学説「士族出身兵は、旧出身藩に忠誠を誓い、政府が統御できないおそれがあるから」が現段階では妥当で、特定の政治家にしか統御できない軍隊を解体するために、徴兵制が導入されたとする説をとった。最後に、歴史的な諸要素を鑑みると、徴兵制は明治政府の既定路線ではなく、偶発的かつこの時代に起きた特定の政治問題の解決のために選ばれたと結んだ。

午後は、酒井晃氏(明治大学)が「近現代日本セクシュアリティ/ジェンダー研究と(歴史)教育」と題し、教員向けに報告を行った。私自身詳しくなかったセクシャルマイノリティに関する報告で、様々なセクシャルリティ関係の用語の説明がなされ、セクシャルマイノリティがどのように現在学校教育で教えられているのか、また近年刊行された書籍の内容を論じた内容だった。ジェンダー史が明らかにしてきた歴史をどう高校の現場で教えるのかという課題を突き付けられた刺激的な報告であった。

「問い」と「資料」。これから求められる授業に不可欠なこの二つのキーワードを、深く考えるきっかけとなる日本史サマーセミナー2019 3日目となった。



生徒への「課題」と「作業」に関する板書
(新指導要領の「問い」に該当するもの)



学制と徴兵制についての生徒の思考の様子

[セミナーの様子]

